

結果

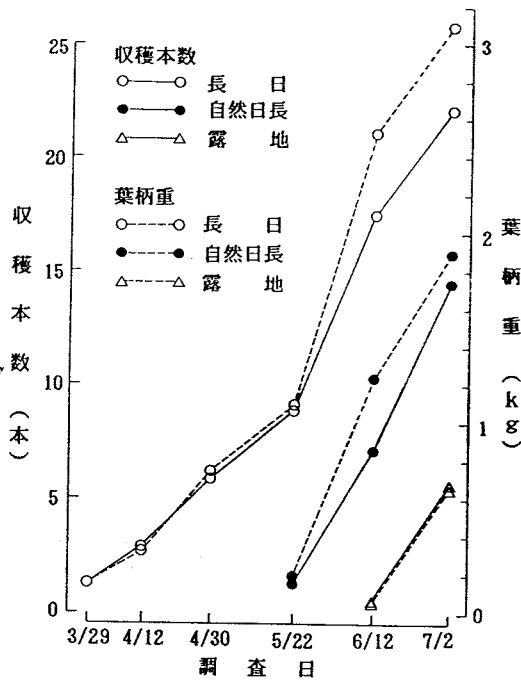
1. 温度条件が休眠に及ぼす影響

第1表に温度条件によるほう芽の状況を示した。5、10及び15℃に保温した区は12月までは全株とも葉が着生していたが、その後、一部の株を除き新葉の出現と同時に落葉があって、冬期間の葉数に大きな変動はなかった。しかし、葉の生長は高温ほど早かった。また、落葉後に新葉が出現（ほう芽）しない株があり、5月になってもほう芽しない株が多かった。

これらに対して対照区は1月に地上部は全株枯れたが、3月よりほぼ全株ほう芽を開始した。

2. 日長条件が休眠に及ぼす影響

冬期間においても、長日区の地上部は枯れることなく生長を続けた。ハウスは無加温のため、第1図に示したように1991年1月上旬～2月下旬には-4～-5℃まで低下する日があり、この時、葉に寒害を受けて葉柄が折れることもあった。



第2図 日長条件が収量に及ぼす影響 (1991年)
注. 数値は1株当たりの累積を示す。

自然日長区は12月上旬から生長が緩慢となり、12月下旬には生長が止まり、約半数の株の地上部が枯れた。その後、これらの株は3月上旬にほう芽が始まった。

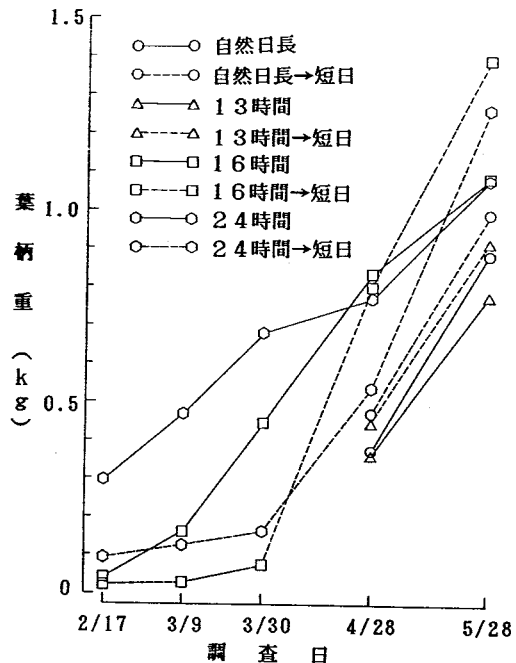
第2図に示したように、長日区は3月下旬より収穫が始まり、その後、7月上旬までに飛躍的に収量が上がった。

自然日長区は、5月下旬より収穫ができたが、7月上旬までで長日区の約70%の収量であった。休眠は低温期間を経て覚醒するので、休眠株はハウス内、露地にかかわらず、ほぼ同時期にほう芽を開始した。しかし、ハウス内の自然日長区の気温は露地より高いことから、ほう芽後の生長は速やかであった。

3. 日長時間と短日処理が休眠に及ぼす影響

生育気温は第1図に示したように、1992年のトンネル期間中はトンネルによる保温性が認められ、氷点下になる日はなかった。また、短日処理中に処理間の気温差は小さかった。

生育状況をみると、第2表に示したように1月27日までに、16時間区と24時間区は、自然日長と13時間区に比



第3図 日長時間及びその後の短日処理が収量に及ぼす影響 (1992年)
注. 数値は1株当たりの累積を示す。